

シ ソ *Perilla frutescens* Britton var. *acuta* Kudolは、中国を原産とするシソ科の植物である。食用や薬用に広く利用されるので栽培植物として品種が多く、分類にも学名にも混乱がある。生葉や果穂は刺身のツマをはじめ、さまざまな料理に添えられ、いまや私たちにとって欠かせない調味料としての役割を果たしている。このシソは中国医学の古典ともいべき『名医別録』や『神農本草経集注』にも「蘇」として記載があり、「気を下し、寒中を除く、その子が最も良し」としてシソの葉や種子が用いられていた記録がある。李時珍の『本草綱目』(1596年)にも、蘇葉は「辛し、温にして毒なし」とした上で「肌を解し、表を発し、風寒を散じ、^{めくら}氣を行し、中を寛にし、痰を消し、肺を利し、血を和し、中を温め、痛を止め、喘を定め、胎を安にし、魚蟹の毒を解し、蛇、犬の咬傷を治す」と記録されており、蘇子(種子)とともに漢方生薬として使われてきた植物である。

で薬にしよう」と気が付いた。ちなみに、舒には気分が良くなるという意味がある。後世、この草が紫蘇と呼ばれるようになったのは、舒と蘇の「すう」という発音が似通っていたためではないかとも伝え

紫蘇葉

—寒邪を散らす香り高い生薬—

新潟薬科大学 学長／千葉大学 名誉教授

山崎 幹夫

Mikio Yamazaki

中 国に伝わる民話(ミャオウエンウェイ編『中国の民話薬草編』東京美術)には次のような話がある。陰暦9月9日の菊の節句の日、ある村の金持ちの息子たちが蟹の食べ比べをしていた。そこに来合せた老人は「蟹は寒性の食物だから食べ過ぎると腹をこわすよ」と若者たちを諫めたが、彼らは言うことを聞かなかった。しかし、やがて夜が更けた頃、彼らは腹痛を訴え始め、冷や汗をかきながら転げまわって苦しむ者もいた。見かねた老人は、弟子を連れて野原に行き、紫色をした草の葉を束ねて持ち帰り、煎じて、若者たちに飲ませた。不思議なことに若者たちの症状は消えた。

老 人は名医として名高い華佗であった。ある夏のこと、華佗が江南の川辺で薬草を採集していたとき、大きな魚を鵜呑みにし、しばらくは苦しむ様子を見せていたかわうそが、岸边にあった紫色の草を食べたところ、やがて苦しみが消えた。この草に涼性の魚による寒邪を散らす温性があることを知った華佗は「この草にはまだ名がないが、紫色をしていて、煎じて飲めば薬になる。紫舒と呼ん



られている。

紫

蘇葉（蘇葉）は第14改正日本薬局方にもシソ
および近縁の植物の葉と枝先を乾燥したも

のであり、解熱、鎮咳、鎮静、健胃の効果が伝承されて
いると規定、収載されている。漢方処方では半夏厚朴湯、
香蘇散、参蘇飲、神秘湯などに配合される。

シ

ソの薬効は精油成分にあるとされ、紫蘇葉の品質として、
葉の両面の紫色が鮮やかでチリメン様のしわがあり、
シソ特有の香りの高い新しいものが良品であるとされてい
る。特有の香りは精油の主成分perillaldehydeによるものであり、
また最近までの研究の結果によると、perillaldehydeには細菌や真菌
に対する抗菌作用が認められる他、ヘキソバルビタールNaによる睡眠時間を延長する作用、
鎮静作用など、中枢神経系に対する抑制作用への寄与を示唆する効果が認められている。
特に中枢抑制効果はstigmasterolとの相互作用として、より明確に発現することが報告されている。

と

ころで、かつて私の研究室に、中国政府の衛生部から派遣された曹さんという研究生が留学していたことがあった。そのときの話で、当時、中国では大量の米がコクゾウムシ（穀象虫）による大きな被害を受けているということが話題になった。そこで、たまたま別の目的のために研究室にあった紫蘇葉抽出エキスを含みいくつかのサンプルについてスクリーニングを試みた。すると、他のサンプルに比べて、紫蘇葉抽出エキスには圧倒的なコクゾウムシに対する“虫よけ効果”が認められた。そこで、これで中国の人々のための食糧の損失を少しは防ぐことができるのではないかと私たちは喝采した。しかし、研究生の曹さんは「中国の人たちは紫蘇の匂いが好きでない。だからこの結果はプロジェクトの対象にはならない」といい、結局、私たちが挙げかけた祝杯はくやしませのやけ酒となって終わったことがあった。

実

は、特有のperillaldehydeの香り高い生薬こそが良品であるとして古くから紫蘇葉を重用してきた中国において、しかも中国を原産とするシソの香りを中国の人たちが好まないと言った曹さんの言葉を私はいまも信じきってはいない。帰国後の曹さんの消息は、衛生部を退職したという知らせ以後、不明のままになっている。